

## 意見陳述書

原告共同代表 須藤昭男

私は、原告の須藤昭男といたします。この度は松山地裁裁判長の前で、伊方原発運転差止訴訟原告として意見陳述できますこと感謝しております。

私は東京電力福島第一原発が立地しています福島県浜通りから約100キロ離れた福島県会津に生まれ育ちました。会津は1000円札の肖像になっている野口英世の出身地で、明治維新の戦争での山本八重の活躍は大河ドラマにもなり、観光地として有名なところですよ。

原発誘致を大熊町議会が決議したのは1961（昭和36）年9月です。この時私は大学受験に失敗し、「喜多方ラーメン」で有名な喜多方市の呉服店でアルバイトをしながらの浪人生活をしていましたが、原発の問題を耳にすることはありませんでした。

大学生活が始まったころの世相を思い返しますと、池田内閣の所得倍増計画、東京オリンピック、新幹線・高速道路の建設が進んでおり活気に満ちていたように思います。大学生活でのテーマは「経済成長、物の豊かさは、人間を幸せにするのか。」というようなものでした。ゼミで学び、議論し、お話を聞いたりしていました。

3年の終わりのころ「人間は物質的に豊かになっても幸せになれない」との結論になったのです。しかし、その先が全くわかりませんでした。友人と激論しついに切れてしまい、「どうでもいい、こんなこと考えるのは止めた！残り1年の学生生活だ、なんでもやって、楽しくすごすよ」。友人と別れたその日は、1964年3月6日の夕暮れでした。

寂しい帰路、京成電鉄市川八幡駅に近づいたとき「あなた、教会にいらっしやい」一人の老婦人が、走り寄ってきたのです。キリスト教や、聖書、教会のことなど何も知りませんが、どこでもよかったです。「ああ、ゆきますよ」、案内されたところがインマヌエル市川キリスト教会でした。

このできごとを契機にクリスチャンになりました。大学卒業後、社会人として働く中に人生を考え、自分の生涯をキリスト教牧師として用いようと決心、会社を2年で退社。牧師として備え、1972年4月松山に「インマヌエル松山教会を設立」するためでした。

当時の松山の人口は37万人でしたが出迎える人もなく、親戚や知人もありませんでした。住民登録を終え、松山城を見上げたとき何か孤独を感じたことを

思い出します。そのような牧師生活のなかで陰ながら祈り応援しサポートして下さるご夫妻がありました。その方は東京電力原発部門の重責を担う方でした。また教会学校を終え、伊方原発に勤務して家族を養っている方もいました。私は、このようの中にありましたから、原発には何一つ違和感もなく原発は素晴らしいと思い、生活していたのです。

そのような中に2011年の3・11がおきたのです。テレビで報じられる悲惨な光景、聞こえてくる懐かしい東北訛りの言葉は、あまりにも悲しい叫び声でした。愛媛県や松山市でも避難者の受け入れがされるとのニュース。何か大変なことが起こっている、何とかしなければと、焦る気持ちと何もできない無力さを感じていました。

そのようなとき、故郷福島から電話がありました「大変だぞー。大熊町の人たちは会津に避難してきている、観光バスは一台も来ない」、故郷にただならないことが起きている。「原発！これはとんでもない代物かもしれない」と思いだしたのです。数日後6月1日付けで「須藤牧師は福島県出身とお聞きしていますのでお手紙を差しあげます。伊方原発のこと考えませんか」と草薙弁護士からお手紙をいただき、「伊方原発をとめる会」の設立に参加するようになったのです。

その後福島の現実を見聞きするにつれて、驚きと悲しみの連続でした。「福島を繰り返すな」を叫び続けました。また、この伊方原発運転差止訴訟には約1400名と多くの方が原告に名をつらね、ここに至りましても尚も原告になりたいと言われる方がおられ、原告の方々の熱意に圧倒されることです。原告の方々の心からの叫びをお聞きいただきたいという思いでもあります。

## 2011年の3・11を起点として 何が起き、何が起きているのかということです。

2011年3月11日14時46分宮城県沖においてマグニチュード9・0の大地震発生、東日本大震災 未曾有の大災害をもたらしたのです。

東京電力福島第一原発の現場では

3月12日	1号機がメルトダウン、	水素爆発
	2号機メルトダウン	
14日	3号機メルトダウン	水素爆発
15日	4号機検査で停中	でしたが 水素額発

いまだ経験したことのない原発事故が発生したのです。私が詳細をのべるより、当時現場の責任者であった吉田所長の調書に記されていることを引用します。

2011・3・15早朝、「完全に燃料が露出しているにもかかわらず、減圧もできない、本当にここだけは思い出したくないところです。ここで何回目かに『死んだと』思ったんです」「東日本は壊滅だ」と。このことをしるした吉田さんは、すでに亡くなっています。直接お会いしたこともありませんが、吉田さんの生の声を聞くように、事故の凄まじさを受け止めたいと思います。

「東日本は壊滅だ」それは、北は盛岡、南は首都東京を超え神奈川に至る半径250キロで避難しなければならない事故となることを意味していました。しかし第2号機と4号機の奇跡と言われることが起こり、「国家存亡の危機」から救われたのです。この悲惨な事故により17万人近い方々が、住み慣れた故郷を見えない放射能の恐怖におびえながら避難したのです。東京電力福島第一原発事故と避難などのついでにレポートや書籍、写真集などは数多く出版され人々の涙を誘っています。

**伊方原発運転差止訴訟が始まり10年が経過しました。**

私は原告共同代表として今日までできました。2016年5月31日、伊方原発3号機の運転差止めを求めて仮処分申請をするときのことを忘れることはできません。

手続きにはいったとき、「仮処分で原発が止まり、訴訟で敗訴になった場合、四電から多大な損害賠償を請求される可能性があり、仮処分申請には大きなリスクが伴う」と説明がありました。弁護士との打ち合わせの時、弁護士の先生は「須藤さん大丈夫ですか」と確かめるように問われました。「はい大丈夫です、お願いします」と答えました。

その日県美術館ホールで記者会見のときです。ある新聞記者さんが私を指名して「大きなリスクを冒してまで仮処分申請をする動機は何か」と質問してきたのです。私は即座に「故郷福島原発事故を見たのです。被災者の叫びをきいたのです。何を犠牲にしてもやらなければならないと思いました。福島の悲惨な事故を繰り返してはならないのです。福島を忘れてはならないのです。」と答えました。故郷福島の現実、「原発とともに幸せな人間社会は来ない」ことを教え語っているのです。

**「福島を繰り返すな、忘れるな」**

**この一つの願いで今日までできました。**

私が最初に原発被災地福島の地を踏んだのは2012年3月末でした。浜通りを車で南下、打ち上げられている大きな船、無残な建物、そして「これより20キロ圏立ち入り禁止」の大きな看板とお巡りさんが立っていたのには、事故の

深刻さを肌で感じ驚きました。

その後は被災地の実情、被災地の人々の気持ちを知りたくて仮設住宅を訪ね、現地での集会に参加するなどしてきました。20キロ圏に入るには「町長発行の臨時通行証」が必要なのです。ようやく浪江町出身の方と知り合いになり20キロ圏内に入り視察できたのは、2015年3月でした。

このような経過をたどりつつ見たこと、聞いたこと学んだことのいくつかをお話したいとおもいます。

#### ① 東京電力福島第一原発事故、その時、現地の人はどう受け止めていたか。

あの悲惨な事故から11年が経過しました。コロナ禍でお会いできないでいるAさんに電話し裁判で福島のことをもう一度陳述しなければならないことを話し11年過ぎた今、あの時を思い出して話して頂きたいとお願いしました。原発を推進する立場にあった方です。故郷を追われ避難地で生涯を送ろうと決意し健康もすぐれないなか「話したくない」という雰囲気でした。なんとか重い口をひらき語りだしたのです。

あの事故がおきたとき「何がおきたんだべ・・・。何が起きたか見当もつかなかった。戸惑ったというのが正直なところだ」というのです。それは、東電が現地住民に説明していたのは、「原発は五重の壁」で護られているから絶対に安全です。第一の壁が破れても第二、そして最後の第5の壁は「がっちりとした頑丈な建屋が保護」しているから安全です。「五重の壁、安全だ、安心だ」と教え、町には「原子力明るい未来のエネルギー」の大きなアーチ看板、原発は豊かさや幸せをもたらすもの。五重の壁、心配ないと言われ続けるうちに「原発は絶対に安全という根拠なき確信のもとに安全神話」となっていたのです。

原発が来てから、確かに生活は楽になった。町の人に仕事ができ、出稼ぎに行かなくてもよくなり、道路はよくなり、建物は綺麗になる・・・、その声には、今もこれからも、永遠に故郷に帰れない寂しさがにじみ出ているようでした。

「東電はウソを言っている」と語った今は亡き浪江町町長馬場さんの言葉が、思い出されたことです。

#### ② 福島県政史上初めてとなる避難命令のもとでのこと。

福島県では、3・11大地震が起こったその日に、県政史上初めてとなる「東京電力福島第一原発から2キロ圏内の住民に避難命令」を出します。しかし2キロが10キロに、10キロは20キロにと拡大されてゆくのです。

大混乱の中、避難がはじまりました。避難行程で悲惨な事故、事件がおこるのです。語るのも辛いことですが、原発事故の事実として知って頂きたいのです。牛小屋に残された牛は、飢えて牛小屋の柱をかじり死んでゆく。飼い主の酪農家

さんは「原発さえなければ」とベニヤ板に書き残し自殺するなど、語ることでできない悲劇が次々に起こったのです。

請戸の浜の悲劇の現場に立ってきました。「助けてくれ！」「待っている、助けにゆく」放射性物質拡散の誤情報が多くの救える命を救うことができなかつたのです。

**大熊町の双葉病院の避難**は悲惨なものでした。

ご高齢の入院患者さん、重度の認知症を患う方々とともに避難することは容易ではありません。医療関係の方々の必死の努力も空しく、**多くの方が命をおとす**のです。ある看護師さんの担当の患者さん、何としても避難させたいと必死でしたが、途中で命をおとしたその所に救援のヘリコプターが来たのです。でも死人は乗せることができません。看護師さんはなんとしても避難させてあげたいと思ひ叫んだのです。「この方は、息はしていませんが生きています。お願いします」息はしていないが生きています、係の方は無言で肯き、ヘリに乗せ避難したのです。

このお話は浪江町から避難した方です。「これだけは裁判長さんに話してください。」と、涙ながらに言われたことがあります。

避難し仮設住宅での生活を送って2年ほどたった時のことだそうです。ある造り酒屋さんが、酵母をもって避難していました。避難先まで持っていった酵母をもとにお酒を造り、仮設住宅の皆さんに振る舞ったのです。仮設のみなさんは「浪江の酒が飲める」と大喜びで集まり飲みました。

飲んだ皆さんは涙をながしたのです。涙、また涙でした。それは、喜びでも感激でもない、悲しみの涙だったのです。私には計り知れない涙です。**酵母は同じでも水は浪江の水ではない、酒の味は全くことなっていたのです。**「原発は浪江の酒の味まで奪ったのか」との悲しみの涙をながしたのです。

この酒の味がものがたるように、原発事故はその土地に住み生活していた人の根本を奪いさるのです。親たちとともに避難した子供たちの生活も、悲惨なものでした。差別や偏見、いじめという悲しい中に、日々生活しなければならないのです。なんという悲しい事実、命を絶った子供さんもいるのです。これが原発事故の事実なのです。福島を繰り返してはならないのです。

**③この悲しい事件は過去のことではなく今、この時も起こり進んでいるのです。福島のことを忘れないでください。**

先日6人の青年男女がビルの屋上から外を眺めている写真が送られてきました。その下に「甲状腺ガンが見つかり、手術、治療を重ねる6人。原発事故当時6～16歳で福島に住んでいた」と記してありました。子供の甲状腺ガンの深

刻な問題です。

福島県では2011年の原発事故の当時 18歳以下の子ども約38万人を対象に、被曝により発症の可能性がある「甲状腺がん」の検査をしています。その結果、2021年6月末までに約300人が甲状腺がん、またはその疑いと診断されたのです。小児甲状腺がんは年間100万人に1人～2人しか発生しない希少なガンなのです。明らかに多発しているのです。

そのうちの一人B子さんは、高校生の時に甲状腺がんが見つかりました。3年生の夏休みに手術を受けました。進路を決める三者面談も病院内で。術後は声もかすれ、話すのが恥かしかったそうです。それでも大学は推薦でスムーズに入学ができました。喜びもつかの間、入学直後の健康診断で血液の数値に異常がでて再び精密検査を受けると、医師から「ガンの再発」、肺にも影があると言われたのです。大学生活と治療の両立は無理、夢と希望の大学生活は4ヶ月で終わったのです。このような青年がわかるだけで300人いるのです。

ガンであることを告白したり、報道することはタブー視される容易でない環境であることを思うと、もっと多くの方が人知れず涙しておられるのではないのでしょうか。見えない涙を、人知れずにすすり泣く泣き声を聞いてください。このような福島の苦しみ、悲しみを繰り返してはならないのです。

◆原発事故後の廃炉がままならないことは語るまでもありません。

◆除染と言っても山はできない、「ひさしぶりにキノコを採ってきて食べようと思ったら汚染されている」、山の恵み、キノコや山菜の恵みはなくなった。

◆ある農家の方は田んぼに立ち怒りをあらわにしていました。「除染しました、新しい土をいれた。田んぼや畑の土は先祖が汗水流して耕し、そしてまた耕し、年月かけてできたのだ。そんな簡単にできない、ふざけんな、何が復興オリンピックだ！くそくらえ」、怒鳴っている姿が悲しくてなりません。これが原発被災地福島なのです。福島を繰り返してはならないのです。

友人が2022（令和4）年2月19日の福島民報新聞を送ってくれました。伝える「ふくしまの今」をみて驚きました。

※除去土壌再利用へ向けた取り組みを知る。→除去土壌、これ汚染土のことです

※・・・その後、特定廃棄物埋め立て処分施設に移動し、展望台から埋め立て地での作業の様子などを見ながら説明を受けたとの記事。特定廃棄物、一般には仮置き場です・・・何を高校生に教えているのでしょうか。

※廃炉、除去土への理解を深める。

いくら丁寧に説明しても「汚染水は汚染しているのです。」高校生には「海洋放出を説明しているというのです。何をどう説明、理解させようとするのか。漁師

さんたちにとって海洋放出は最悪のシナリオなのです。約束はどうなっているのか、「東電よ、またウソをいうのか」といいたいです。

このように、悲しい福島を、この愛媛、四国に繰り返してはならないのです。蜜柑の香り、文化の香る遍路道、美しい瀬戸内海を汚染水の海にしてはならないのです。伊方原発 3 号機はプルサーマル。伊方には活断層があり、伊方原発の危険は指摘されています。一刻も早く止めなければならないと思います。

運転差し止めに 生きた司法判断を切にお願いし、私の陳述といたします。ありがとうございました。